

会告 III

第 20 回 (2016 年度) 認定輸血検査技師試験の結果

平成 28 年 9 月 30 日

認定輸血検査技師制度

協議会 会長 岡崎 仁

審議会 会長 加藤 栄史

試験委員長 加藤 栄史

【1】 第 8 回 一次試験 (研修終了確認試験)

1. 受験申請者数：198 名
実受験者数：193 名 (欠席者 5 名)
2. 結果
 - 1) 平均：90.5 点 (最高 100 点, 最低 65 点)
 - 2) 合格者数：127 名 (合格率 65.8%, 127/193)
3. 内容と講評

認定輸血検査技師制度第 8 回一次試験 (研修終了確認試験) は 6 月 26 日 (日), 京都府立医科大学を会場に行われた。試験時間は 1 時間で, 内容は輸血検査の基礎, 不規則抗体同定, 計算問題などとした。昨年と同様, 基本的な問題であり, 殆どの受験者が最後の計算問題まで回答していた。さらに, 今年は回答選択肢の数を問題文に明記し, 問題の難易度がやや易しくなった事から平均点が 90.5 点と, 好成績であった。ただし, 「血液型判定」, 「緊急時の赤血球製剤 (血液型) 選択」, 「抗原表から存在する可能性の高い不規則抗体の推定」の不正解者は, 総合で及第点であっても不合格とした。結果, 合格率は 65.8% と, 昨年とほぼ同様の合格率であった。

【2】 第 19 回 二次試験 (認定試験) 結果

1. 受験者数
 - ・申請者 273 名中, 欠席者 7 名で, 実受験者は 266 名であった。
 - ・実受験者 266 名中, 二次新規受験者は 127 名 (47.7%), 再受験者は 139 名 (52.3%) であった。
2. 試験結果
 - 1) 成績
 - 筆記試験
平均点：65.1 (61.8), 最高点：89.8 (87.3), 最低点：28.9 (45.1)
 - 実技試験
平均点：53.5 (52.6), 最高点：94.2 (94.0), 最低点：0 (0)
() は 2015 年の成績
筆記, 実技とも 100 点満点,
実技の血液型：抗体：カラムの配点比率は 3：2：1
 - 2) 総合判定
 - ・実受験者 266 名中, 合格者は 69 名 (合格率 25.9%) であった。
 - ・受験科目別受験者数 (合格者数, 合格率%) は以下のごとくであった。
筆記のみ：28 名 (14 名, 50.0%)
実技のみ：37 名 (23 名, 62.2%)
筆記・実技：201 名 (32 名, 15.9%)

3. 試験概要と成績について

1) 概要

認定輸血検査技師制度第20回二次試験は8月20日、21日、北里大学を会場に行われた。申請者273名中、7名が欠席したため、実受験者は266名であった。これは昨年の273名に比し、7名の減少であった。「筆記+実技」の中では新規受験者が127名、再受験者が74名であった。

全体の合格率は25.9% (69/266) で、昨年の25.6% (70/273) とほぼ同等であった。単一科目受験者の合格率は筆記 (50.0%)、実技 (62.2%) にあったのに対し、「筆記+実技」の合格率は15.9%と不良であった。

2) 筆記試験の評価

平均点は65.1点で、昨年の平均点 (61.8点) とほぼ同じであった。合格基準点以上の得点者は90名 (39.3%) で、昨年 (33.9%) に比し、やや上昇した。今年からマークシート問題と記述問題 (基礎、臨床、計算) に絞り、各問題とも正答率が平均で6割以上であった。受験者がしっかりと知識を修得した結果であると考えられた。

3) 実技試験の評価

全体の平均点は53.5点で、昨年 (52.6) と同レベルであった。合格基準点以上の得点者は79名 (33.2%) であり、昨年 (32.9%) とほぼ同等であった。但し、実技のみの合格率が62.2%であったのに対し、両科目の受験者では27.9%と良くなかった。

血液型検査の試験では及第点に達した受験者は24.8%であり、他の試験に比して低率であった。具体的にはRhD陰性検体について減点が昨年より減少した。さらに、問題を熟読していない事による不正確な文言の記載や記載もれが目立った。また、教本などを熟読していない事による誤りも散見された。受験生の思い込みで、正常検体においても異常反応 (mf など) と回答する受験生も認められた。その為、0点 (マイナス点も含む) の受験者が47名 (19.7%) であった。

不規則抗体同定試験の問題では抗原表を正しく読み解く力が求められ、“可能性の高い抗体”と“否定できない抗体”を過不足なく記すことが合格の必要条件である。一次試験で、抗体同定のできない受験者がふるい落とされている事などから、及第点を取得した受験者が68.0%と好成績であった。

カラム凝集法の問題は2検体を使用して交差適合試験を実施した。さらに、机上問題として基礎的な問題を2問、症例問題を1問出題した。多くの受験者は検査手技が正しく実施されていた。ただし、問題を熟読していないためか不正確な文言の記載や記載もれによる減点が認められた。

4) 評価について

筆記試験は加点方式で、実技試験の各科目の得点は満点からの減点方式による。各科目の得点の合計点が基準点以上を合格とした。ただし、1科目でも0点であった受験者は不合格とした。評価ランクに関しては、一定の基準にてA~Fに分け、絶対的評価とした。各科目、合計ともに各々100点満点として、基準点以上の合格をA~C、不合格をD~Fに分けた。

今回、実技試験において、血液型・抗体・カラムの全てにおいて及第点を取得した受験者は18.1%と残念な結果であった。また、合計点で合格点であってカラム凝集法の試験が0点であった受験者が5名に認められ、不合格とした。血液型検査、不規則抗体同定試験、カラム凝集法の試験で0点の受験者は各々47名、23名、45名であり、F評価とした。

4. まとめ

筆記試験はほぼ例年と同じ成績であり、実技試験は血液型を除き、良好であった。従って、最終合格率は25.9%と、最近の5年間で高い方であった。特に、今回は実技のみの受験者の合格率が62.2%と好成績であった。この事から、系統的に正確な知識、手技に十分な時間を掛けて修得することで合格する事が可能である。